

沖縄八重山文化研究会会報

第 234 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
〒098-1882 那覇市首里金城町三ー六
〇四三

第二三四回沖縄・八重山文化研究会は、二〇一二年一月二三日、県立芸大付属研究所内で開かれた。一月は例年、沖縄で奄美を考える会、宮古の自然と文化を考える会、沖縄・八重山文化研究会の合同研究会として行われ、今回で一二回目となる。

奄美から久万田晋氏（沖縄県立芸術大学教授）「ビデオ紹介『奄美大島の八月踊り』」、宮古から宮川耕次氏（宮古郷土史研究会）『月と不死』の神話―人間の死の起源を語る―」、八重山から波照間永吉氏（沖縄県立芸術大学教授）「オモロの二つの流れ―神女オモロと名人オモロ、そしてオモロ主取―」の各氏がそれぞれ発表。フロアからも活発な質問が飛び交い、熱気あふれる例となった。

久万田氏は二〇〇四年から〇七年にかけて制作された記録映像「奄美大島の八月踊り」を鑑賞しながら、何を記録するのかという観点から制作の三つのポイントをあげながら、芸能としての八月踊りとそれを包み込む奄美大島の文化について説明した。

宮川氏が取り上げた『月と不死』の著者

ニコライ・A・ネフスキー（一八九二〜一九三七年）はロシア生まれの東洋言語学者で、一九一五年に日本に留学。一九一七年にロシア革命が起こると生活の拠点を日本に移し、以来、東北やアイヌ、宮古などを研究した。ネフスキーは一九二二年、二六年、二八年と三度宮古を訪れ、宮古での研究を自らの古代日本の研究の中で「神話創世の中心の研究」と位置づけ、言語から習俗・神話と探求していった。その成果が『月と不死』である。宮川氏は『月と不死』を「人間の死の起源」を語った未完の論文であるとして、ネフスキーの分析を行い、若水・脱皮・再生にかかる神話の分布状況や、ネフスキー後の研究状況などを概略的に述べ、メラネシア、ニューギニアなど太平洋の各地に残る神話との比較研究が課題とした上で、月に不死、死の水があることは琉球の独自性といえる、とした。

例会終了後はささやかな懇親会がもよおされた。三研究会はそれぞれ地道に活動を続けているが、今後とも合同例会がもてるようにしていきたいものである。



奄美市笠利町笠利の八月踊り



ビデオ紹介「奄美大島の八月踊り」

久万田 晋

八月踊りとは、奄美の島々で夏の折目の時期に盛んに踊られる男女の歌掛けによる集団太鼓踊りである。島によって名称は異なっており、たとえば徳之島では七月踊り、夏目踊りなどと呼ばれる。また現在では女性だけで踊られる沖永良部島の遊び踊り（手々知名）や沖縄本島のウシデーク（臼太鼓）も類似の芸態を持っており、これらの芸能の発生と伝播については、互いに深い関わりがあると考えられる。二〇〇四年度より国立民族学博物館の記録映像プログラムとして「奄美大島の八月踊り」を制作することになり、筆者も制作に参加することとなった。この記録映像プログラムの制作において特に留意したのは以下の三点である。

第一に、奄美大島における八月踊りの地域的多様性を描き出すことである。八月踊りといっても、奄美大島の北東部と西南部ではかなりスタイルが異なっている。北東部（笠利町、龍郷町方面）では、一曲毎に

ゆっくりから急速調へと加速してゆく。一方、西南部（宇検村、瀬戸内町方面）では、曲中ではあまりテンポを変えず、緩急の曲をメドレー的に次々と踊り継いでゆく。そして中間地点では、両者のスタイルが地域によって入り交じっているのである。こうした地域によるスタイルの相違を映像としてどのように表現するかに重点を置いた。

第二に、民俗文化の中の八月踊りの姿を描き出すことである。八月踊りがさかんに踊られるアラセツ・シバサシ行事は、前述のように南島の夏正月とも言われ、旧暦のお盆が沖縄・奄美で盛んになる以前の夏の折目行事と考えられる。この時期を中心に、奄美大島の北から南まで、かつてはヤサガシ（家探し）、ヤーマワリ（家回り）といった、集落の一軒々々残らず八月踊りを踊って回ったのである。また、奄美大島中部から南西部にかけては、アラセツ・シバサシから八月十五夜の間の時期に豊年祭がさかんに行われている。この時期には都会に暮らす集落出身者も帰省して参加し、豊年祭が集落の結束を象徴する行事として行われている。今回の記録映像では、こうしたアラセツ・シバサシのヤサガシ（家探し）における八月踊りの様子や、豊年祭の中での八月踊りの様子を映像として描き出すことも大きな目的とした。

第三に、奄美大島の人々にとつての、「体験としての八月踊り」を描き出すことである。シマ（島）に生まれ育った多くの人は、故郷の集落で八月踊りを子供の頃から体験している。人生の中で踊りや歌の経験を積み重ねつつ、先輩達に様々なことを教わりながら習得し、最終的には歌掛けのリーダーとなってゆく。この映像記録では、シマの人々にとつての八月踊りの習得過程の一端を、映像として明らかにしたいと考えた。戦後の米軍占領期から奄美の日本復帰（一九五三年）、その後の日本全体の高度成長期を通じて、奄美の社会も急激な変化を被った。こうした社会の変化は、八月踊りの状況にも大きな影響を与えてきた。八月踊りを継承しているベテラン世代や、八月踊りを受け継ぐと頑張っている若い世代が、現在の八月踊りの状況に対してどのような認識を持っているのか、社会の変化に伴う芸能の変化をどのように受け止め、未来へと繋ごうとしているのかを、インタビューによって描き出そうとしてみた。

映像を鑑賞する方々が、奄美大島の八月踊りという芸能の、地域文化としての多様な姿と、伝承文化としての深みの一端を感じていただければ、制作に関わったものとして幸いである。



宮古の「月と不死」神話
ネフスキーの若水研究

宮川 耕次

はじめに

ニコライ・A・ネフスキー（一八九二～一九三七年）は、ロシアの言語学者・民族学者で、二二年から三回も宮古を訪れ、方言・歌謡・神話・習俗など幅広く研究した。宮古研究の先駆者の一人として大きな成果を上げるとともに、地元の慶世村恒任など多くの人々に影響を与えた。

一五年に二年間の留学で来日したが、ロシア革命のため帰国できず十四年間日本にとどまり、東北のオシラ様、アイヌ民俗、宮古、台湾の曹族の研究などに奔走する。帰国して八年後の三七年、スターリンの粛清に遭い銃殺。五七年名誉回復される。

ネフスキーの宮古への旅の目的は、古代日本の研究のなかで、「神話創生の中心」の探究と位置づけている。さらに、外国の民族研究ではその国の言語習得が不可欠との認識を持っていた。これは、「民族学的言語学的」方法と呼ばれた。

若水の神話とは
ネフスキーは二回目の訪問の時、宮古初の

通史編『宮古史伝』を著した慶世村恒任からアカリヤニザガマの話聞いた。その概要は、次の通り。

宮古島に人間が住むようになった頃、天の神・月の神が人間に永遠の命を与えようと、アカリヤニザガマを使者に「人間にスデイ水、蛇に死水を浴びせよ」と命じた。両桶の水を担いで下界に降りて来た使者は、長旅の疲れから桶を下ろして放尿、その間に蛇がやってきてスデイ水を浴びてしまった。しかたなく残りの水を人間に浴びさせた。それで人間は死ぬようになった。

これに怒った月の神は、罰として使者に両桶を担いで月に立たせている。それでも神は、永遠の命でなくともせめて人間に若返りさせようと、シツ（節行事）の新夜に雨を降らせている。

死の起源神話の『脱皮型』

ネフスキーは、この伝説は「死の起源」を語っておりこの種の伝説は世界中に分布している、そして蛇の動物などから『脱皮型』死の起源と分類でき、これは太平洋の民族に多い、と分析する。

現在、この若水の伝説がどのように分布しているのかについて調べてみた。宮古では水納、多良間、伊良部、池間などの島々をはじめ下地、上野、城辺、平良に分布する。さらに八重山、奄美、沖縄にもある。

本土にもその痕跡がみられる。かつて琉球をはじめ日本本土に広く伝承されていたとされる。

その後の若水研究

折口信夫など多くの研究が見られるが、ここでは人類学者・石田英一郎（一九〇三～一九六八年）と神話学者・吉田敦彦（一九三四年生）を取りあげたい。

まず石田は、ネフスキーの未完の論文を氏なりに完成させる立場から世界的に分析、「蛇と月」の関わりは旧石器時代まで、「水と月」は先史時代までそれぞれ遡る、と述べた。吉田もメソポタミアの世界最古のキルガメッシュ叙事詩に「死の起源」の話があることを紹介、また「脱皮型」は台湾、メラネシア、ニューギニアなどが濃厚地、と指摘した。

むすびに

ネフスキーは、宮古（琉球）で方言や歌謡など多彩な研究を続けたが、所期の目的であった「神話創生の中心」の探究を一応達成した、とも言えよう。

さらに「若水の話」の琉球神話のさらなる調査や、脱皮型伝説の太平洋の民族などの濃厚地との比較・検討などが、これからの課題と言えよう。



オモロの二つの流れ
— 神女オモロと名人
オモロ、そしてオモ
ロ歌唱者

波照間 永吉

オモロが古琉球の祭祀に欠かせない歌謡であったことは一般の認めることと思う。このオモロがその時代、どのように認識されてきたかは『球陽』などの史料からもうかがえる。たとえば、『球陽』の一〇七項「夏居敷、旨を奉じて阿摩和利を攻め滅ぼす」には、鬼大城が敵の危難を逃れるためにオモロを謡って神の加護を得たこと、さらには、王城にたどりついて、やはり鬼大城が再びオモロを謡ったら王の誤解が解けたことなどが記されている。さらには『球陽』の二一一項には、久高行幸からの帰途、海上で大時化に見舞われ難破目前となったとき、数名親雲上がオモロを謡って風波を静めた話が記されている。これらの話から、古琉球では武人も一般の役人もオモロを謡っていたことが知られる。二一一項の話では、数名親雲上が「幼稚の時より」オモロを日頃から稽古していたとある。これから推測すると、オモロには、誰が謡って

も良い時代があった、ということができよう。

これらの事例をあわせ考えると、古琉球にあっては、オモロには大きく二つの流れがあったことになる。すなわち、『おもしろさうし』に一般にみられる神女たちの管掌するオモロと男性の関与するオモロである。前者は『おもしろさうし』における「神女オモロ」(『おもしろさうし』巻一・三・四・六・九・十二など)であり、後者は「オモロ歌唱者」のオモロ、さらには「おもしろ主取」に代表される王府官人の管掌した「みおやだいらのおもしろ」(王府の公式儀礼のオモロ)となる。

さて、「おもしろ歌唱者」というのは、これまで「オモロ歌人」などと呼ばれてきた存在で、『おもしろさうし』の巻五・七・八・二二など、幾つかの巻に散在する。その名を確認すると、「あかわり・あかともい・あめくにや・いとかず・いちやはな・いしでん・いちよのし・おぎやかし・大きくて・かねしくにがみ・くばのし・さばちきよ・しまぢり・なべたる・はしかり・まかねこ・まかるこ・まこゑし・まみちけ・やまきし・やまきにや・ゆたいきよ・よたまし・かねぐすく大や・おもしろとのばら・おもしろねやがり・あかのこ」など、二十数名が挙げられる。「おもしろねやがり」や「あかい

んこ」はその代表的な存在であった。

この人々が各地を遍歴・放浪する存在であったことは、アカインコの説話がそれをよく語っている。アカインコの事績を語った、オモロ巻二一六五に記された記事はその代表であり、『琉球国由来記』の巻一四一九七項に記された浦添仲間村で子丑の日に種取りをしない由来(これは『遺老説伝』五五項にも載っている)も、アカインコの呪力を讃えている。

これらから、「オモロ歌唱者」が自らを「口まさしや」(言葉が正しく実現する。霊験あらたかである)と謡い、各地の権力者のもとを訪れ、オモロで讃える時代があったことを想定することが出来るであろう。これは、宮古の神歌を目にした柳田国男が、村の歴史を伝える「あやご部」を想定したことともどこかでつながっているように思える。さらには、チョンダラーなどの遍歴・放浪の芸能者を受け入れる社会的素地を準備するものとして、「オモロ歌唱者」の時代を想定することが出来るのではなかろうか。



文化短信

安里屋ユンタを後世へ

歌碑建立資金造成コンサート開催

石垣市白保出身の星克氏が作詞した「安里屋ユンタ」を後世に伝え、その功績を顕彰する歌碑建立資金造成チャリティコンサート（同実行委員会主催）が一月一八日夕、石垣市民会館大ホールで開かれた。

歌碑建立は白保の有志らが昨年九月に期成会（前盛立会長）を立ち上げ、すでに白保公民館敷地に台座に碑名を刻名した自然石を設置している。自然石は幅約三メートル、高さ、奥行きは約二メートル。開南地区に山林を所有する県立八重山農林高校から譲り受けた。揮毫は白保在住の前里玄耀氏。歌碑建立資金造成コンサートには、八重山舞踊・琉球舞踊の研究所や道場など九団体、白保の老人クラブや婦人会、白保棒術保存会、白保獅子保存会など総勢一五〇人が出演、多彩な歌や踊りで舞台を盛り上げたほか、星克家の一門も「鷲又鳥節」「安里屋ユンタ」など歌や踊りを披露。最後は出演者全員と会場が一体となって、「安里屋ユンタ」を歌い上げた。

石垣島サンゴウィーク
親子で苗作り体験

サンゴにちなんだイベントや八重山の豊かな自然環境を楽しむ「石垣島サンゴウィーク」（同実行委員会主催）が三月五日スタートし、市内各地でさんご苗作り体験やカヌー体験、八重山のサンゴ展など多彩なイベントで盛り上がった。サンゴウィークは三月一日まで行われ、期間中に海岸清掃やオニヒトデ駆除、コーラルウォッチなどのイベントが開かれる。

同ウィークは、サンゴ礁の保全やエコ・グリーンツーリズムの普及、次世代の人材育成などを通し、世界に誇る大自然と観光産業が調和した新たな観光メニューを創出するのが狙い。

五月底地ビーチで開かれたさんご苗作り体験（八重山漁業協同組合観賞用漁業部会サンゴ養殖研究班主催）には、家族連れ約四〇人が参加した。

白保竿根田原洞穴発掘調査

新石垣空港建設予定地にあり、今回が最後の全面調査となる白保竿根田原洞穴発掘調査が一月七日から行われ、あごなど人骨

数十点が発掘された。白保竿根田原洞穴は、骨から直接測定を行ったケースとしては日本最古となる二万四〇〇〇年前の人類が見付かっている旧石器時代（後期更新世）の遺跡で、今回発見された人骨に近い場所からは石器や土器のようなもの、木片なども見付かっており、人骨との関連が注目されそうだ。

八重農緑地土木科チーム優秀賞
高校生環境活動全国大会

全国から一六校が出場し、二月八日から一日の四日間、東京で開かれた第33回高校生環境活動全国大会（全国高校生エコ・アクション・プロジェクト実行委員会主催）で、八重山農林高校の緑地土木科プロジェクトチームが優秀賞に輝いた。同校は九州地区代表として出場。上地宏弥さん（緑地土木科三年）、砂川大樹さん（同二年）、齋藤大樹さん（同）、山岸浩樹さん（同）の四人が、「木づかいで守れ、八重山の自然」人の心に緑を！めざせ循環型社会の確立」をテーマに、使用後に捨てられた運搬用荷台（廃パレット）を利用したアドベンチャーランドづくりや県の農林水産部、市内のエコ団体などと連携して行った植樹や河川調査活動への取り組みを発表した。

新刊紹介

歴史地理学の視覚

琉球・八重山理解の深化へ

高橋誠一著

『日本と琉球の歴史的景観と地理思想』

本書のタイトルは、都市と村落における「日本」の方形、「琉球」の円形という「景観」の相違は、自然環境や「歴史」的経緯とともに、「伝統的な『地理思想』の影響を強く受けた結果である」と、読み解くことができる。「伝統的な地理思想」とは、風水である。

まず総論「日本と琉球の歴史的景観と地理思想」で、全体のテーマがまとめられ、琉球と日本の都市・村落の立地や形態は、「風水思想の影響を想定すると理解しやすいことが多く認められる」という視覚を提示する。

これを受けて、続く全一章で日本の飛鳥、紫香楽宮、長崎唐人屋敷、琉球各地の石敢当、今帰仁今泊、奄美龍郷、今帰仁古宇利島を対象とし、最後に日本・琉球の天妃信仰を歴史地理学的側面から考える。言及は琉球にとどまらず、ヨーロッパにもおよび、それこそ「歴史地理学の立場から」

「具体的な景観をもとに」、人の住む地を縦横無尽に比較・検証する。

前著『琉球の都市と村落』（関西大学出版部）では八重山を大きな柱として論じられ、人文地理学会賞を受賞された。本書では、各章のタイトルに八重山の字こそないが、索引では二〇カ所ほど「八重山」が採用され、八重山の事例を琉球全体をみとらず根拠とされている。たとえば、琉球各地の集落の変遷を、前著において八重山古地図から考察された知見に、八重山の古琉球村落の発掘成果などを加えて検証されている（一四八頁）。八重山の事例を、琉球全体のスケールにされているのである。

そして、琉球と「日本」を「同じような土俵で論じ」た本書の成果によって、われわれの琉球・八重山での視野が広がり、その理解を深化させることができるのである。

本書は二〇〇七年から一二年までに発表された論文からなっている。「年齢を重ねても継続すべきである」学問への精力的な取り組みに敬意を表し、地元の思いとしてはふたたび八重山に帰ってくださればと願う。（得能壽美）

（B5判、三六八頁、
関西大学出版部、定価五五〇〇円＋税）

なお、本書の著者・高橋誠一氏は、関西大学文学部総合人文学科地理学・環境学の教授。二〇〇三年の『琉球の都市と村落』は首里や久米村のほか、八重山諸島の五四集落を対象に、明治期の八重山古地図を現在の地形図などと対比させて集落形態を復原し、十四世紀から現在までの非格子状型集落から格子状集落へのおおよその変遷、といった知見が提示されている。第五回人文地理学会賞を受賞した。

また、上記の書評は二〇一二年一二月九日「八重山毎日新聞」に掲載された得能壽美氏の新刊紹介である。著者の了解を得てここに再掲載する。



次回のお知らせ

★二〇一三年六月一六日（第三日曜）予定
★講師・演題ははおっぺお知らせします。